

図書館 forum

附属図書館の1年を振り返って……………	田村 信介	1
医学図書館「情報工房」へのいざない……………	老木 成稔	3
■福井大学附属図書館所蔵の古典籍(6)		
ウィリアム・エリオット・グリフィス書状(三岡八郎宛) ……………	膽吹 覚	5
■私の推薦書		
読書友達はいませんか? ……………	定 清直	9
今こそ戦争を見つめ直しましょう 平和の幸せがいつまでも続きますよう……………	寺田 聡	11
私小説的読書案内……………	松田 和之	13
L.A. ラーニング・アドバイザー		15
附属図書館展示企画2011		17
学*論*究*創*現=情報工房 in 医学図書館		18

附属図書館の1年を振り返って

附属図書館長 田村 信介

たむら・しんすけ

前号でも触れましたが、インターネット、電子図書、電子ジャーナルの普及によって図書館の役割が大きく変化しようとしています。大学全体の役割に対応して、附属図書館の役割にも教育、研究、社会貢献の側面がありますが、特に研究の側面では電子ジャーナルなどの貢献は目覚ましく、既にこれまで図書館が担っていた役割の多くをこれらのシステムに譲っています。大学図書館に期待される機能として研究資料の効果的な収集・調査を支援するサブジェクト・ライブラリアンの役割などが想像されますが、運営資金が先細りする中では時間をかけた実現性や効果の検討と学内でのコンセンサス作りが先だと考えています。

一方教育に係わる側面では、インターネットや電子図書の普及によってワードプロセッサを使っている内に漢字や英単語の綴りを忘れてしまうのと同じことが広範に起こっています。定期試験の答案などを見ても感じられますが、模範となる文章などが簡単に手に入るため真剣に読み書きする機会が減り、説得力のある文章を完成させる能力が低下するなどインターネット等が学生の成長を阻んでいるケースも多くあります。自分の意思を伝える戦略を立て、使う資料を取捨選択し、矛盾無く理解しやすいようにまた簡潔に文章を組み立てる力は、将来社会人として活躍する人材が持つべき最も基本的なものであり、情報リテラシー教育の強化は急務です。またさまざまな事柄が複雑に影響しあう問題が増え、多くの人と出会い異なる考えを理

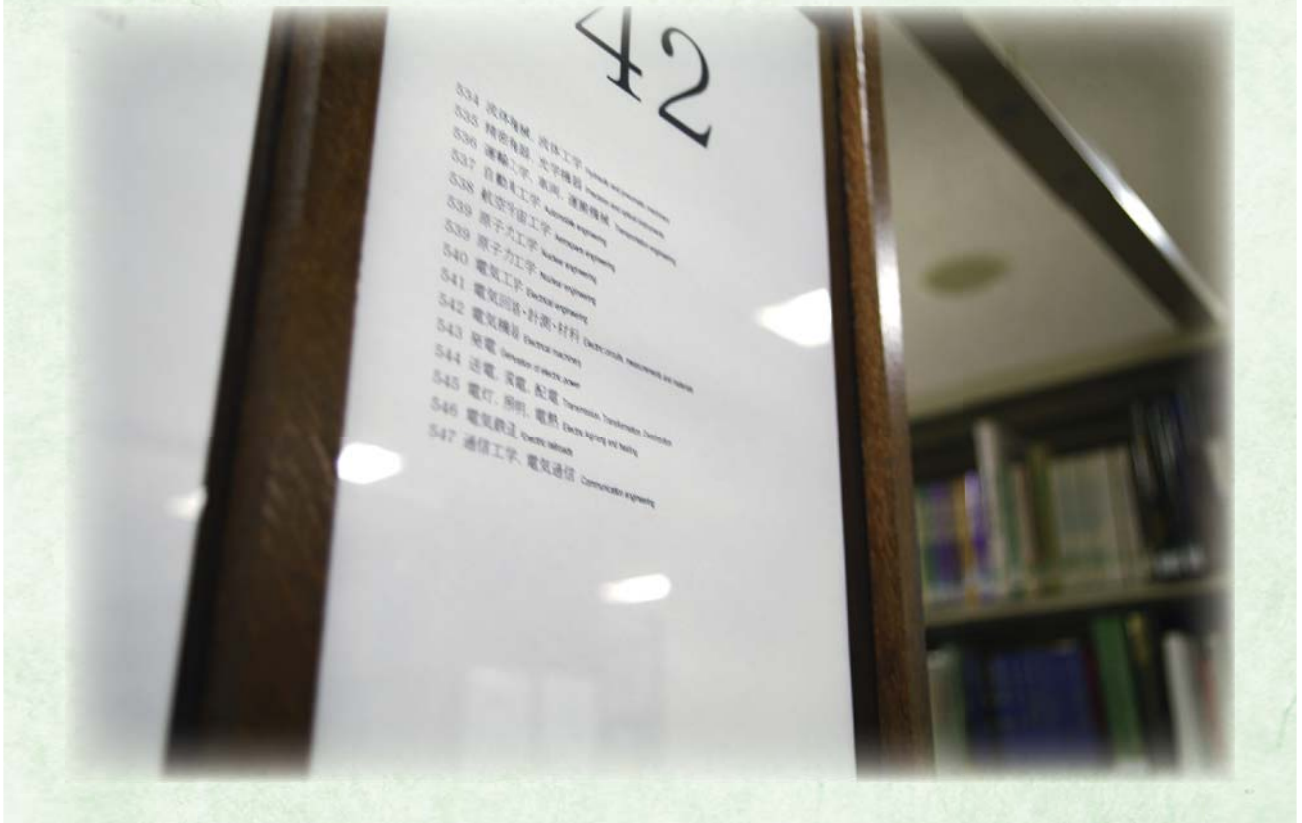
解し、自分の考えと調和させあるいは自分の考えに取り入れる力が重要になっていますが、ソーシャルネットワークなどを通じた出会いでは多様性が重視されているのに反して自身と意見を同じにする人とだけ、あるいは意見を異にする人を敵とみなして交流する傾向もあるように思えます。このように電子化が進む中で情報リテラシーや多様性の理解に係る能力が失われることもあることを考えると、精選されたさまざまな図書がそろい、また多くの学生、教員、職員が集まる場所である大学図書館の教育における役割はより重要になると考えています。社会貢献に関しても、去年はグリム展、グリフィス展の2つの大きな展示会を開催しましたが、大学図書館に対する社会、地域の期待が実感できました。特に地域の文化や歴史に係る情報を集め、また研究者を支援することは先の多様性を育てる観点からも重要であると考えさせられました。

以上の観点から今年の図書館を振り返ると、まずLA (Learning Adviser) の設置は画期的でありました。全学の学生支援施策の一環で配置されたSA (Student Assistant) をLAとして採用し学生の自習支援を担当してもらっていますが、同じく昨年完成した医学図書館の情報工房とともに学生が多様な人と語り合う場が広がる面で大きな効果があるものと期待しています。まだLAを利用する学生の数は多くはありませんが、他大学の例なども参考にして図書館サポーターなどと一緒にさらに活躍して頂ける

ようになればと思います。また前述の展示会とともに、オープンキャンパスに併せて学生の研究やサークル活動を紹介する機会を設け、一層の工夫が必要ではありますが情報リテラシー教育の一つの形態の試行ができました。毎年行っているブックハンティングも学生が自己を表現する能力を磨く場に発展するものと期待しています。また主に研究成果発信の場として整備して来た福井大学機関リポジトリも、博士論文だけではなく修士論文なども登録するようになれば、学生が自身の卒業論文などが他人に読ま

れることを実感できるようになると思っています。このような活動をさらに効果的にするため、既に大学入門セミナーなどで図書館職員も教育を担当しておりますが、図書館職員一同教育能力の一層の向上に努めたいと思います。幸い東海・北陸地区の国立大学では教育で貢献した図書館職員を表彰しようという動きもあります。教職員の方々にも、学生に読んで欲しい図書を積極的に推薦して頂くなど図書館運営へのさらなる協力をお願いします。

(大学院工学研究科情報・メディア工学専攻 教授)



医学図書館「情報工房」へのいざない

医学図書館長 老木 成 稔

おいき・しげとし

昨年12月1日から医学図書館に新しい施設である「情報工房」がオープンしました。この優れた施設を利用できることを学生とともに喜び、設立に関わっていただきました学長、学部長はじめ多くの方々に深く感謝させていただきます。本稿ではこの「情報工房」の施設としての特性と、その名称に込められた学生へのメッセージを紹介します。

情報工房は図書館施設内に設置されたグループ学習用の14室の総称で各部屋はグループラボと呼びます。約10人の小グループが議論し、

学習するための施設（ホワイトボード、プリンターなど）が整えられています。独立性を保つための遮音性とセキュリティー確保の両面を満たすためにガラス張りとなっています。閲覧室では静粛性を求められますが、この情報工房では自由な議論の場を提供しています。教科書、参考書を自由に閲覧することができるのでこれらの資料を駆使してグループ学習の場として使えます。もちろんテュートリアルなどにも利用されることとなりますが、「情報工房」という名称には、学生たちが自発的、自主的に集って



グループでの共同作業を行うという意味合いがあります。

大学の図書館には学習の場を提供するという役割があります。医学の古典から最先端の基礎医学・臨床医学の膨大な知識の習得は容易ではなく、大変な努力を要することは時代が変わっても不変です。そもそも「知の体系」をどう自分の中に組み立てていくのか、これこそが大学生に求められる最も重大な課題です。私達の脳の構造は昔も今も変わりなく、昔の学生が難しいと思ったことが情報社会の恩恵を受けている現在の学生にとって容易になるわけではありません。新しい概念に挑むのは試行錯誤の中で全力で取りかかる以外にありません。

このような状況で医学図書館に求められているものは何か。このような問いの中から「情報工房」のコンセプトは生まれてきました。ネットワーク空間での情報のやりとりで満たされないものは何か。それは個人と個人との生き生きとしたふれあいです。「わかった！」という瞬間を共有し合えるような空間です。情報工房の役割を一言で言いますと、医学・医療情報への取り組み方を学び、これを仲間で共有してより深い理解に達し、このことで情報発信する。このようなグループでの能動的な手作りの

知を獲得する場である、と考えています。ここでいう情報はインターネットでクリックすれば受動的に得られる断片的知識ではありません。個々の断片を精査し、周到な分析を加えて導き出せる「知」であり、これでこそ現実に使うことのできる生きた知識となります。英語の information というよりは intelligence に近い概念ですが、この言葉に相当する日本語はありません。この過程でヒトの脳に備わる「連想」「直感」「関連付け」など、きわめてアナログな能力が総動員されているでしょう。個々人の情報が持ち寄られ、グループで議論を積み上げれば、深い理解とともに新しいアイデアも湧き出してくるのではないのでしょうか。発達途上の学生が課題を共有することで、個人では得られない成果が期待できます。このような火花を散らすセッションの場が生まれれば、発信という作業が次に待っています。

情報を獲得し、練り上げ、発信するという能動的な作業をグループで行うということが「情報工房」のキーワードであり、学生たちが「情報工房」を自在に使いこなし、たくましい知性を育ててくれることを期待しています。

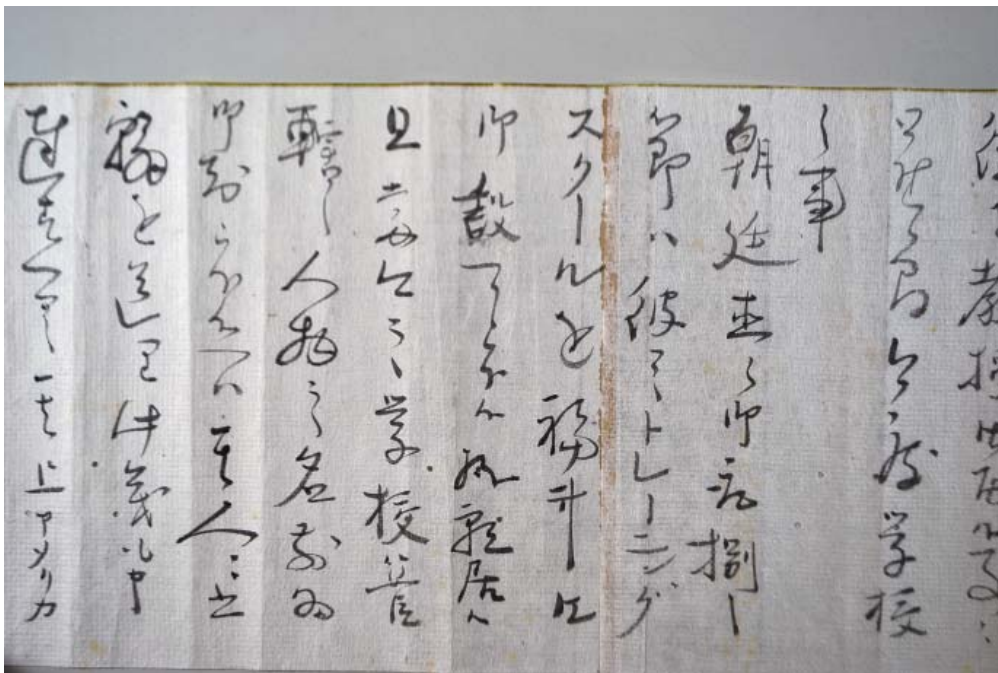
(医学科形態機能医科学講座 教授)

福井大学附属図書館所蔵の古典籍(6)

ウィリアム・エリオット・グリフィス書状(三岡八郎宛)

留学生センター准教授 膽 吹 覚

いぶき・さとる



はじめに

平成23年(2011)の春、本館は財団法人日下部・グリフィス学術・文化交流基金よりウィリアム・エリオット・グリフィス(William Elliot Griffis)に関する史料1点を新たにご寄贈いただきました。この史料は、明治4年(1871)8月10日付で、グリフィスが三岡八郎(由利公正)に宛てて出した書状1通です。この書状は新出の史料で、その内容もグリフィスが三岡八郎(由利公正)に宛てて、日本に師範学校を創設すべきことを進言したものであり、教職大学院並びに教育地域科学部を設置している本学としては、是非とも購入すべき史料であると判断し、日下部・グリフィス学術・文化交流基金にその支援を依頼した次第であります。

昨年はまた、奇しくも本学とグリフィスの母校で

あるアメリカのラトガース大学が姉妹大学提携(現在は大学間学術交流協定)を締結して30周年の記念すべき年でもありました。そこで、本館では本学学生はもとより地域の方々にも広くグリフィスの功績を知っていただくべく、また、本学とラトガース大学の大学間交流の回顧と展望をはかるべく、平成23年11月21日から24年1月12日までの約2か月間、本館1階ギャラリーにおいて「お雇い外国人教師 グリフィス展」を開催いたしました。ご寄贈いただいた新出の史料は、この記念展に花を添えることになりました。

1. グリフィスと福井大学

ウィリアム・エリオット・グリフィス(William Elliot Griffis)は明治時代前期に来日し、福井や東

師を数多御雇入二相成候二不及候、此事件宜敷御取持被下、学校掛之役輩江御相談可被下候、私義ハ唯今より其企二而、生徒を教授仕居候事二御座候間、今度学校之事、朝廷直々御取捌之節ハ、彼之トレーニングスクールを福井江御設可被下候様願居候、且当今之学校ハ管轄之人物之名前為御知被下候へハ、其人二書翰を送り、此義も申達すべく、其上アメリカ及欧洲之学校之設方なども巨細可申上存居候、此事件宜敷御採用被下、諸方江御通達被下様奉願候、余ハ後便可申上候、謹言

八月十日

二白、

私義明十一日新宅江引移可申候、
白山之高ハ九千二百三十尺二御座候、^(ママ)不二山とも余程低く御座候

グリフィス書状の宛名に記された「三岡様」は、由利公正のことです。由利の旧姓は三岡です。由利は五箇条の御誓文の起草者として、また、幕末の福井藩の財政再建を成し遂げた人物として知られていますが、維新後の新政府でも東京府知事をはじめ、貴族院議員などを歴任しています。グリフィスが福井にいた当時を書き残した日記には、しばしば「三岡」(由利)が登場します。由利はグリフィスより15歳年上で、福井にいたグリフィスにとって、由利は彼のよき理解者であり、支援者でもありました。



由利公正
(福井市立郷土歴史博物館所蔵)

さて、この書状の内容を整理すると、次の4点にまとめることができるでしょう。

A) 現在(明治4年8月当時)の日本の教育行政が先ず以ってなすべきことは、外国人御雇教師のもとで学ぶ日本人学生の数を増加させるのではなく、官立の「チャーチャルス・トレーニング・スクール」(Teachers Training School)、すな

わち、師範学校を日本国内に設立し、そこで日本人教師を養成し、日本人教師によって日本の教育システムを確立すべきです。この提言は翌5年(1872)に施行される学制——本書状では「今度朝廷ニおみて皇国之学校一統御支配相成候ニおみてハ」——を念頭に置いて書かれています。

- B) 官立の「チャーチャルス・トレーニング・スクール」は日本に6、7校設置し、その中の1校を福井に設置してほしい。
- C) グリフィス自身は既に福井の明新館において、A)の趣旨に基づいた教育、すなわち、日本人教師の養成を行っていた。
- D) 三岡(由利)にA)・B)を明治政府に働きかけてほしい。また、東京の明治政府の教育行政の中枢にいる人物を紹介してくれれば、グリフィス自らがその人物に師範学校設立を要望する書状を送るつもりであることも伝えています。

グリフィスが明治政府の高官に師範学校設置を求めていたことは、明治4年10月1日付でグリフィスがアメリカの彼の家族に宛てた手紙の中にも「I have written to one or two high officers of the Tokyo Gov't, relative to a National system of education and providing for the first and greatest educational need of Japan-good teachers, I have suggested that six or eight National Normal school be established.」(山下英一『グリフィス書簡』111ページ、(株)シナジー、平成21年6月刊)と記されています。今回新たに発見された書状は、上記の明治4年10月1日付のグリフィス書簡に書かれた文章に対応する証拠史料というべきもので、本書状の出現によって、明治4年8月10日の時点で、グリフィスが確かに師範学校創設を明治政府高官に求めていたこと、そして、その高官の1人が当時の東京府知事であった由利公正であったことが証明されたのです。なお、グリフィスは、B)として官立師範学校の中の1校を福井に設置することを求めています。この誘致は結果的には実現しませんでした。福井県下にはじめて師範学校が設置されたのは、明治7年(1874)5月1日で、それは敦賀県管下の師範学校でした。

3. 三岡八郎(由利公正)からの返信

前章に掲げたグリフィス書状に対して、由利公正がグリフィスへ返送した書状が、ラトガース大学アレクサンダー図書館グリフィス・コレクションに所

蔵されています。その書状の全文を翻刻して、以下に掲載します。なお、判読不可能な箇所が1ヶ所あり、それは□印で記しました。

去八月九日御認之貴翰、十月五日横浜へ相達辱開緘仕候、先以益御清適御渡被成珍重之至二御座候、将亦八月十一日新宅へ御引移之由、可也御都合二も相成候哉と雀躍此事二候、唯々長ク御滞留相成、地方開化二趣候様祈入候、さてハ小生義拜命為御歡御懇被仰下深厚辱畏入候、乍不及依旧尽力罷在候間、尚又御心被添被下度願入候、扱又日本進知之義二付御心付学校之義、縷々御申越被下致承知候、総而御同意至極二付、早速其職大木文部卿江可申入存念二候処、折悪敷小生此中へ不快二而未果延引致候、追而快気方二付出勤次第委細可申間候間、此段御承知被下度候、右二付学校掛人名之義も重鴻中申進候也、右は一応之貴答迄擱筆候、寒冷之節折角御自愛□祈候、不宣
十月十日

由利公正

プロフェスリル

グリッフヒス先生

二伸、白山高サ御申越被下致承知候、格別御慰二も不相成候義と遥察候、
倅彦一事、不相変御尊勞可相成宜敷奉願上候、頓首

この書状が書かれたのは、その内容から判断して、明治4年10月10日と推定されます。グリフィスの書状が書かれた2カ月後です。

由利の書状を読むと、グリフィスがその書状で提案した教育問題（師範学校の創設を含む）について、由利は賛成の立場を表明し、そのうえで彼は時の文部卿大木喬任への進言を記しています。しかし、当時の彼は体調が優れなかったために、この返信が認められた明治4年10月10日時点では、大木文部卿への進言は未だなされていなかったようです。また、由利はその書状で、体調が戻り次第、大木文部卿へ進言を果たすことをグリフィスに約束していますが、それがなされたかどうかは、この返信から知ることはできません。

4. 日本教員養成史の視点からの評価

明治5年（1872）5月29日、東京、湯島の昌平坂学問所跡地に官立東京師範学校が創立されました。この東京師範学校は日本初の官立師範学校です。

同年8月3日に頒布された『学制』第40章には「小学校ノ外師範学校アリ。此校ニアリテハ小学ニ教所ノ教則及其教授ノ方法ヲ教授ス。当今ニ在リテ極メテ要急ナルモノトス」と師範学校が初めて規定されました。そして、翌6年（1873）には大阪と仙台に、更に翌7年（1874）には名古屋、広島、長崎、新潟に相次いで官立師範学校が設置されました。

井上久雄『学制論考』（風間書房、昭和38年10月刊）によりますと、明治初期における官立師範学校設立の背景には、明治4年（1871）12月に文部首脳に提出された「忽弗満氏学校建議」が大きく影響しているといわれています。「忽弗満氏学校建議」を提出したテオドール・エデュアル・ホフマン（Theodor Eduard Hoffmann）はドイツ・プロイセンの人で、明治4年（1871）7月7日に来日し、東京の東学で医学を講じた文部省の御雇外国人教師です。井上氏は「教育の普及を力説するものは、すくなくない。しかし、教育の普及に関して、教師養成の整備を急務とし、これを提唱したものを、ホフマンの建議以前に、みることはできない。」と、ホフマンの卓越した先見性を評価しておられます。

本館所蔵のグリフィス書状が書かれたのは、「忽弗満氏学校建議」が提出された明治4年（1871）12月よりも約4ヶ月早い、同年8月10日でした。単純に時間的な問題として見れば、グリフィスはホフマンより4ヶ月早く、師範学校の創設を提言したことになります。しかし、ホフマンのそれは文部省への建議書であり、グリフィスのそれは由利公正（東京府知事）に宛てた個人的な書状に過ぎません。両者を同じ土俵に上げて論じることはできません。また、グリフィスの師範学校創設に関する提言が由利公正に届いていたことは確かですが、そこから大木喬任文部卿をはじめとする文部首脳にまで届いたか否かはわかりません。すなわち、現時点ではグリフィスが明治4年8月10日付で由利公正に送った書状が、日本の師範学校創設にどれほどの影響を及ぼしたかは不明と言わざるを得ないのです。しかし、たとえそれが個人的な書状であったとしても、明治4年（1871）8月10日の時点で、グリフィスが師範学校設置を急務とすることを当時の明治政府の高官（東京府知事）であった由利公正に提言していたことは、グリフィスが教育者として確かな見識とそれを実行に移す行動力を持っていたことを示すものといえるでしょう。本館所蔵のグリフィス書状は、グリフィスの伝記に新たな1ページを加える史料であり、かつ近代日本における教員養成史研究においても貴重な史料といえるでしょう。

私の推薦書

読書友達はいますか？

本来の仕事以外のことで、最近読んだ本について話し合える友達がいることは、とても楽しいことである。その人の外見や雰囲気とは異なり、意外な本を読んでいたりするものだ。最初に紹介するのは、「本を読まない」と老化する」という意味深な帯のついた、「**定年と読書—知的生き方をめざす発想と方法—**」（鷺田小彌太著 文芸社文庫 ISBN978-4286102733）。人文系の大学教授であった著者が、私のような理系の研究者に読書の楽しさと必要性を説いているように思える。毎日の生活の中で読書を習慣として取り入れることの重要性が書かれており、定年退職後に時間が出来てからではなく、定年にはまだまだ時間がある人や（私は現在 45 歳、福井大学の定年まであと 20 年もある）、学生さんにとっても参考になる一冊ではないかと思う。本を読むことで個人が経験し理解しうることを遙かに凌駕する、深くて実りあるたくさんの人生経験を積むことができる。特に自然豊かな本学松岡キャンパスでは、周囲に人が少ないため、読書をしなければ非常に狭い人間関係の交流だけに陥ってしまう。この環境では、読書は絶対に必要である。また、読書友達との交流は、前向きで心豊かな時間を過ごすことにつながっていく。



定年と読書

附属図書館運営委員

定 清 直

さだ・きよなお

私が読みたい本に出会うのは、週末の新大阪駅の書店で目に留まる時が多かったが、最近は読書友達から勧められて読むことも増えてきた。これまで自分が食わず嫌いだったジャンルでも、その友人達の巧みな話術(?)のせいで、読んでみようかな、と思えばしめたもので、どんどん内容に深まっていく。私は決して活字中毒ではないが、友人の推薦というのは案外素直に信じてみるタイプのである。「**沙高樓綺譚**」（浅田次郎 徳間文庫 ISBN4198923299）は、いくつかのショートストーリーによって構成され、それぞれがあらゆる分野のエキスパートである語り部による夜話や怪談というスタイルをとっていて、本当の話なのか、まったくの作り話なのかわからないような、不思議な雰囲気を醸し出している。夕食の後のゆったりとした時間をこうした本を読んで過ごすことはとても楽しい。「**永遠のゼロ**」（百田尚樹 講談社文庫 ISBN978-4062764131）は、太平洋戦争時代にまつわる一つの謎を探るという展開で、ドラマティックな結末に溜飲



沙高樓綺譚



永遠のゼロ

が下がる思いであった。私が生まれるほんの20～30年前に何が起きていたのか、今とても強く知りたいと思う。その点からすると最近の歴史的出来事としては、旧ソ連の解体と冷戦の終結がある。「**自壊する帝国**」(佐藤優 新潮文庫 ISBN978-4101331720) は当時外交官であった筆者による現代史の物語である。この著者の本は何冊か読んだが、自分の仕事についてストーリーを立てて語っていることや、さまざまな人との交流を通じて垣間見える歴史の断面、さらにもし本の内容がすべて事実とすれば、いったい頭の中がどうなっているのかと思うほどの膨大な記憶力が印象に残る。実はわれわれ研究者も、自分の研究内容をいかにストーリー立てて話すかがとても大切である。なぜその研究をしているのか？研究テーマの必然性は何か？一言で言えば何がわかったのか？次に何をするのか？という基本的な問いに、分かり易い表現で答えることが重要である。人に「どう伝えるか」は、研究と教育の上で重要な技量の一つであり、その意味でこの本はまさに同業者の手によるものである。

歴史と言えば、今年のNHK大河ドラマ「平清盛」に関する本が書店で平積みされ、新しい本も出版されているようである。私が今読んでるのは「**平家物語**」(宮尾登美子



自壊する帝国



平家物語

文藝春秋 ISBN978-4167287092) である。歴史としてではなく、現代と変わらぬ人間模様がえがかれ、とても身近に思える。複雑な登場人物の関係を解説書片手に読んでおり、読書と言うより調べ物に近い。なぜそうなったのかといえば、私の自宅(神戸市)周辺がまさに源平の歴史の地であり、それにちなんだ名称も数多く残っていて、もともと興味があったことが挙げられる。神戸港(兵庫区)は日宋貿易を経て発展した大輪田泊であり、平清盛の別荘があったという雪見御所も、かつて息子が通った保育所の隣である。その北側には平野商店街があり、福原の都があった場所と伝えられている。その山あいを西に進むと合戦の地「鶴越(ひよどりごえ)」「一ノ谷」がある。休日の朝は本を片手に、ゆるやかな坂が続く平家ゆかりの地を散策してみるのもいいと思う。本を読むことと、例えばウォーキングのような運動を結びつけること(歴史ウォーキング)を身の回りでも実践してみよう(ただし、くれぐれも歩きながらの読書は慎むように)。

出張の移動時間は読書に限る。これだけまとまった時間を、本を読まずに過ごすのはもったいない。大阪までならサンダーバードでの往復で単行本1冊。太平洋を横断する飛行機では(時差ボケで早起きしてしまい、その後なかなか眠れないホテルでの早朝の時間も加えると)単行本4冊は読める。どんな服を着ていこうかと考えるのと同様に、どんな本を出張に連れて行こうかと考えることはとても楽しい。そのためのとっておきの1冊に、読書友達が推薦してくれた本も加えてみよう。

(医学科病因病態医学講座 教授)

今こそ戦争を見つめ直しましょう 平和の幸せがいつまでも続きますよう

工学研究科 生物応用化学専攻

寺田 聡

てらだ・さとし

わたしたち40才代の中年族には、宇宙戦艦ヤマトというのは懐かしいアニメです。ガミラスという悪者に地球をぼろぼろにされ、地球を救うコスモクリーナーを手に入れるべく、イスカンダル星に旅立つという物語です。

先日、たまたま2010年公開の実写版「ヤマト」を拝見したのですが、映画を見ている間中、涙が出て止まりませんでした。昔懐かしさのあまり、ではありません。ヤマトがイスカンダルで手にするのは、「放射能除去装置」だったからなのです。

昨年3月の東日本大震災では、津波で多くの街が壊滅しました。さらに原子力発電所の損壊で放射能汚染が近隣にひろがり、福島県の一部地域では住民が退去しております。放射能除去装置さえあれば、除染が進み、避難地域の方々も自宅に戻ることができるのです。科学者として、そのような装置を作れないもどかしさと、そこに暮らす人たちの悲しみを思うと、涙が止まらなくなるのです。

わたくし自身は東日本大震災や原発の事故に何ら貢献できておりませんが、福井大学からは夏休みの機会などを利用して、多くの学生がボランティアとして東北の復興事業に参加してくれました。ありがたいことです。

ボランティアから戻って来た一人の学生から、話を聞く機会がありました。本当にそこかしこが崩れ、荒廃した街の様子を語ってくれました。そして、がれき除去に従事している間にも、近くで遺体がみつかったらしく、サイレンを鳴らしてパトカーがやって来た状況を涙ながらに話してくれました。

この風景はまさに戦争の惨禍そのものです。そして、その惨状に心を痛め、力を尽くそうという若者たちの存在に、わたしは大いに勇気づけられました。頼もしくもあり、このように他人を思う暖かい心と行動力をもった学生が本学に数多くいるということに、誇らしい気持ちです。

同時に、「戦争と若者ボランティア」とからは、いわゆる「神風特攻隊」のような、忌まわしい記憶が頭をよぎります。

「永遠の0(ゼロ)」という、百田尚樹さんによる小説が講談社文庫より市販されています。これは、零戦に乗って特攻死したパイロットの物語です。小説冒頭の特攻シーンは、実際に戦艦ミズーリ号に対して行われた特攻を敷衍したものです。他に



永遠のゼロ

も、航空隊員の実話が数多くちりばめられており、小説ではありますが、実際にあったことと考えてもよいような小説です。太平洋戦争で若者がどのような思いで戦い、苦悩し、そして死んでいったかが深く心に刻まれます。そして、読後の感動も大きいものです。単なる小説として心揺さぶられる読み物としても、ぜひ一読をお勧めします。600ページもある大部なので、読むにはかなり時間がかかりますが、あっと思わせる展開と、その度に心が揺さぶられ、よい読書体験になると思います。

戦争そのもの、とくに太平洋戦争について丁寧に書いてある良書に、「大東亜」戦争を知っていますか（倉沢愛子著、講談社現代新書）があります。学校ではなかなか教えてもらえない内容ばかりで、太平洋戦争というものの実状がよくわかります。いけないことだよ戦争は、と単純に述べる訳ではなく、その頃の日本の状況、とくに国際的な関係の中でどうであったかということが客観的に述べられています。戦争責任はもちろんわれわれ日本人にありますが、しかし他の国々はどうだったのでしょうか。批判的に見る視点を与えてくれます。



「大東亜」戦争を知っていますか

加えて、意外に知られていないことも、たくさん記載されています。たとえば、太平洋戦争は「ハワイの真珠湾奇襲」で始まった訳ではない、「マレー上陸作戦」が最初であることが冒頭に記されています。

また、オランダはインドネシアを植民地としており、日本はここを占領します。そして多くのオランダ人が収容所に入れられたのですが、

そこで数多くのオランダ女性が強制的に「慰安婦」にされたという事件も生じています。

さらに、日本軍に協力した東南アジアやインドの独立運動家たちのことも述べられています。当時のアジアの状況、植民地であったアジアというものがよく理解できます。

このような、あまり知られていない事実が紹介され、きちんと説明されています。ぜひ一読し、とくに太平洋戦争とはどういうものであったかを理解してほしいと思います。

大学の教員として、これからの社会を背負っていく学生のみなさんには、決して戦争など無い、平和な社会を保ってほしいものと願っております。他人を思いやる優しく温かい心を持ち、同時に、きちんと歴史を理解し、あるべき道を進むことができる、そんな人であり続けてください。

推薦図書

1. 永遠の0（ゼロ） 百田尚樹 講談社文庫
2. 「大東亜」戦争を知っていますか 倉沢愛子 講談社現代新書 1617

私小説的読書案内

総合図書館運営 WG 委員

松田和之

まつだ・かずゆき

学生時代、互いに行動パターンを熟知し合っていた仲間内で、学内での居場所を探すのに「Aに会いたければBに行け」という戯れ言めいた言い方がはやったことがある。私の場合、なぜか（図書館ではなく）書籍部で発見される確率が高いとされていた。確かに、空き時間にはよく書籍部に入り浸っていた記憶がある。学術書から週刊誌や情報誌まで何でもありの雑然としたスペースは、知的な好奇心もそうでない好奇心も分け隔てなく満たしてくれた。やがて月日は流れ、縁あって福井大学に奉職することになるのだが、当時の文京キャンパスにもやはり、小さいながらも母校のものと同じ「匂い」のする書籍部があった。現在のオープンなスペースにさま変わりする以前の、どことなく隠れ家的な雰囲気懐かしい。その旧書籍部から、学生向けに読書案内の小冊子を作りたいので本を三冊推薦して欲しい、という依頼を受けたことがある。どのようなコメントを添えて推薦したのか、今となっては記憶がおぼつかないが、推薦した本のタイトルなら覚えている。

まずは翻訳本から一冊、『**ちょっとピンぼけ**』（原題は *Slightly Out of Focus*）を選んだ。地雷原に散った伝説の戦場カメラマン、ロバート・キャパが命懸けで遺した手記である。頁をめくるごとに、飄々とした文章で綴られた臨場感あふれるエピソードの数々にぐんぐん惹き込まれてゆく。ノルマンディー上陸作戦、世に言う「史上最大の作戦」を上陸部隊の兵士の目線で捉えた証言は歴史的ドキュメントとしても貴重だが、この

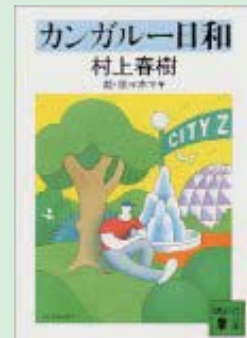


ちょっとピンぼけ

本の魅力の大半は、いかなる状況下でも人生を朗らかに肯定してみせるキャパの凜とした生き方に負っているのではないだろうか。彼と親交があった訳者たちのあとがきは哀惜の念に満ちている。

残りの二冊は、学生時代に親しんだ W 村上の本のなかから一冊ずつ、多少なりとも意外性を狙ってピックアップした。村上春樹の短篇集『**カンガルー日和**』。そして村上龍の自伝的小説『**69**』。前者に収められた『五月の海岸線』は、私事だが、物語の舞台で主人公の「僕」と同様な喪失感にとらわれた経験がかつてあっただけに、とりわけ思い入れの強い作品である。ノーベル文学賞候補の呼び声も高い村上春樹だが、その文学の本質を理解しようと思えば、独自のパラレル・ワールド的な世界観に立脚した一連の長篇小説を精読しなければならない。トリッキーなタイトルで話題を集めた近作よりも、まずは初期の大作『**世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド**』を手にするべきだろう。

名は体を表すという



カンガルー日和



69



世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド

が、不穏な息吹をみなぎらせる春の樹に対して、龍の文学には荒ぶる魂がくねり舞う趣がある。近年の作品『半島を出よ』は、北朝鮮問題と地方分権問題、さらにはホームレスの問題をもアクロバティックに融合させた



半島を出よ

痛快な長篇小説で、読書の楽しみを保証してくれる。同じ近未来小説でも、グルーヴ感あふれる悪文で読者を悪酔いさせるのが、初期の問題作『コインロッカー・ベイビーズ』だ。

言葉には意味を超えた呪縛力があることを再認識させられる。だが、どの作家にも一生に一度しか書けない性格の作品があるとすれば、村上龍のそれは『69』だろう。その無防備なま



コインロッカー・ベイビーズ

での青臭さが嫌味を感じさせないのは、そこに普遍的な思春期の感情が描き込まれているからに違いない。

W 村上の小説に言及した流れで、私の好きな現代作家の本をさらに二冊紹介しておきたい。最近読んだ小説のなかで最も強い感銘を受けたのが、マスコミでも取り上げられて話題

になった百田尚樹の『永遠の0』だ。0は零戦のゼロ。太平洋戦争を描いたフィクションだが、さまざまな経歴を持つ戦争体験者たちの証言をもとに物語が編まれており、秘話と呼



永遠の0

びにふさわしいエピソードが満載されている。登場人物の設定には紋切り型の感が無きにしても非ずだが、この小説には、何といても読者の心を驚づかみにして激しく揺さぶるエモーショナルな力がある。特段涙もろい方でもないし、「泣ける小説」という評判にはむしろ警戒してかかったのだが、見事に泣かされてしまった。

あまり話題に上らないが個人的に注目している作家に、恒川光太郎がいる。二つの中篇小説から成る代表作『夜市』は、現在「角川ホラー文庫」で読むことができ

るが、ホラーという形容は彼の作品にそぐわない。この作家がこれまで一貫して描いてきた「異界」は、どこか人懐っこくノスタルジックな世界であり、とりわけ『風の古道』（『夜市』所収）を初め



夜市

て読んだ時には、知らず知らずのうちに自分が物語の中に入り込んで懐かしい風景を目にしているかのような、何とも不思議な感覚にとらわれた。恒川光太郎が描く異界には、日本人の心の深層に広がる無意識の領域と響き合うものがあるのではないだろうか。

『夜市』に限らず、ここで紹介した本は文庫本で容易に入手できるものばかりだが、いずれも見てのとおり、大学の教育・研究に直に役立つ学術書でもなければ、社会に出たのちに必要とされる実践的な知識やノウハウが詰まった実用書でもない。系統立った学問的な読書や具体的な達成目標を伴う読書も確かに重要である。だが、特に若い頃には、先入観や損得勘定に縛られることなく、感性のアンテナに引っかかった本を手当たり次第に乱読することも必要なのではないだろうか。この雑文がその一助となれば幸いである。

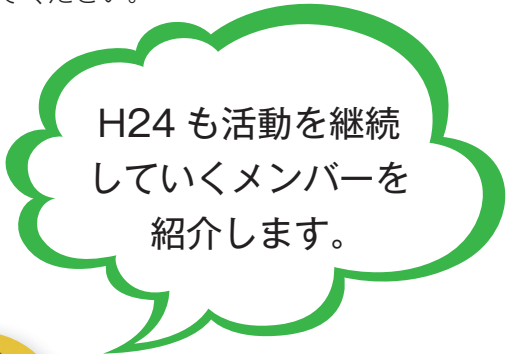
(教育地域科学部地域科学課程人間文化講座国際文化系 教授)

L.A. ラーニング・アドバイザー

総合図書館では、平成23年10月から、ラーニング・アドバイザー（学習相談員 以下L.A.）活動を開始しました。当初は3、4限に活動していましたが、後期試験期の1週間前からは、相談時間を19時までにしたところ、多くの方に訪れていただき大盛況のうちに今年度の活動を終わることができました。

平成24年度は4月から活動します。気軽に立ち寄って相談してください。

①氏名
②所属・学年・研究分野
③自分が学生生活の中で大変だったこと・苦勞したこと
④ここを聞いてくれたらな♪



- ① 平 貴仁 (たいら たかひと)
- ② 工学研究科 物理工学専攻 院2年
研究分野：素粒子・宇宙論
- ③ もともと生粋の文系なので、数学や物理を勉強することがそもそも大変でした。
- ④ 線形代数や微分積分は学科を問わず重要です。何事も基礎が大事なので、これらの分野の基礎、応用を問わず、質問してください。一緒に考えましょう。



- ① 田中 侑己 (たなか ゆうき)
- ② 工学研究科 情報・メディア工学専攻 院1年
研究分野：画像処理
- ③ 一人暮らし。しかし、今ではその苦勞を吹き飛ばすぐらいの楽しい毎日です。
- ④ プログラミング、エクセルなど、パソコン関係全般的にOKです。演習問題など勉強で分からないこと、レポート、卒業研究について何でも相談してください。



- ① 北崎 千聖 (きたさき ちさと)
- ② 工学研究科 電気・電子工学専攻 院1年
研究分野：電力（数学、物理）
- ③ 専門的な授業の内容理解や、レポート課題。
- ④ レポート作成方法、自主学習で分からなかった問題など、小さなことでもいいので聞いてください。



- ① 西川 真代 (にしかわ まよ)
- ② 教育学研究科 教科教育専攻 国語教育領域 院1年
研究分野：国文学（中古文学）、国語教育
- ③ グループでの授業作りや、レポート課題、教育実習です。
- ④ 教員を真剣に目指している方へ教員採用試験の勉強法を伝授します。レポート添削もやりますよ。

似顔絵は「似顔絵イラストメーカー」で制作しました。

H23 年度で卒業・修了する L.A. メンバーに L.A. で大変だったこと、よかったこと…etc. 思い出ぽろぽろ語ってもらいました。

- ★自分では理解していることを、わかりやすく丁寧に説明して教えるのはとても大変だったが、その分自分の勉強の復習にもなり、やりがいがあった。
- ★一緒に L.A. の仕事をした仲間は、普段あまり関わりが少ない他学科の人ばかりだったので、友達の輪を広げることができた。
- ★L.A. に知識がないとせっかく聞きに来てくれた学生に迷惑がかかるので復習の必要性を痛感した。
(1年次の各学科共通科目である、力学、微積、線形代数、電磁気学の知識は押さえておく。)
- ★工学部内の同じ科目であっても授業内容が異なる場合もあるので、その時の指導が大変だった。
- ★相談者のいないとき、3階でもくもくと書架整理をしているのが辛かった！
- ★書架整理によって、ここにこんな本があったのかという発見があり、指導にも役立てられた。
- ★初めて質問を受けた時は緊張したが、解き方などを理解してもらえた時はサイコーです！
- ★質問に来てくれた人がその後も、質問に訪れてくれたことが嬉しかった。

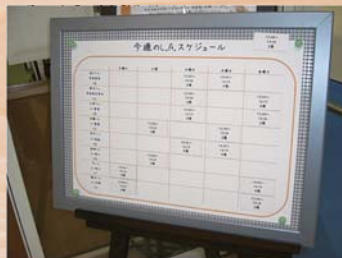


L.A. メンバーが皆さんからの質問をドキドキワクワクしながら待っていたのが伝わったでしょうか。L.A. をやってみたい方も参考にしてくださいネ

何を聞いたらわからないという方へ

今までにこのような相談を受け付けました。

- * 基礎数学系（微分積分、線形代数、フーリエ変換・フーリエ級数…）
応用数学、C言語などプログラミング、専門系（電磁気学、熱力学、ベクトル解析、情報通信工学…）の各種課題について
- * グループワークでのコミュニケーションの取り方
- * 教員免許取得に関する相談
- * 研究室選択について
- * TOEIC について
- * 就職活動について … etc.



LA のスケジュールは
図書館ラウンジ前にあります。



“ラーニング・アドバイザー”は
オレンジのベストが目印です。

ラーニング・アドバイザーについて、質問・予約等したい方は la-reserve@ml.cii.u-fukui.ac.jp



附属図書館展示企画 2011

附属図書館では所蔵資料の公開と教育・研究活動の紹介を目的にさまざまな企画展示を行っています。

平成 23 年 4 月 7 日 (木) ~ 5 月 20 日 (金)

祝！入学者のための図書館企画展示 キーワードで図書館しましょ♪

学生が新しく図書館を利用するにあたり、学生生活と図書館を「学ぶ」「悩む」「就活する」「語学する」「楽しむ」「恋する」という6つのキーワードでリンクして紹介しました。

図書館サポーターによる館内ツアーではスタンプラリーを取り入れ、また、「コトノハメッセージ」として大学生になっての夢や希望を葉の形をしたメッセージカードに書いてもらい展示しました。



平成 23 年 5 月 26 日 (木) ~ 6 月 30 日 (木)

書墨溢香～本の香り 墨の香り～

「書墨溢香(しょぼくいっこう)」は書道部と図書館との初のコラボレーション企画です。

文学や和歌を読み心で感じ取った思いを書道で表現し、作品の元となった原資料と共に展示しました。文学や和歌の世界観を書道で表現することや日本の文字文化に興味を持ってもらえたらという想いを込めました。



平成 23 年 7 月 1 日 (金) ~ 8 月 5 日 (金)

第 4 回写真部&写真同人ふおとん展 わたしと詩の世界

写真部および写真同好会ふおとんの学生らとのコラボレーション企画です。この企画は工学部全体で取りくむ創成教育のひとつであり、この協働企画も4回目となりました。今回は「詩」のイメージを写真で表現しています。回を重ねるごとにオリジナルの作品も加わるなど、多様な工夫が施され、多くの利用者が足を止めて熱心に見入っていました。「まさに鑑賞と表現の一体化だ！」という感動のメッセージなども数多くいただきました。



平成 23 年 8 月 9 日 (火) ~ 9 月 30 日 (金)

高校生のための夏休み企画 『行ってみんけ？ 知の泉』

大学図書館を肌で感じてもらおうと8、9月の夏季休業期間、市内の高校生・予備校生対象に総合図書館を開放しました。さらに、大学で学ぶ楽しさに触れてもらえたらと、展示ホールにて福井大学にしかないユニークな研究や活動を各研究室の教員・学生の皆様にご協力いただき、ポスター、映像、画像、実物モデル等々、様々な媒体を使って紹介しました。

高校生はもとより、展示に携わった学生にとっても良い経験になったようでした。



平成 23 年 10 月 21 日 (金) ~ 11 月 14 日 (月)

グリム展 若人よ勇気を持って！福井大学でグリムを語ろう

平成 24 年はドイツでグリム童話が出版されてから 200 周年ということで、グリム童話研究第一人者である筑波大学名誉教授小澤俊夫氏が実際にグリムをめぐる地を旅した写真パネルを展示しました。『ラプンツェル』の舞台となった塔や『灰かぶり』に出てくるはしばみの木など目の前に新たなグリムの世界が広がりました。また、小澤俊夫氏による講演会『グリム兄弟とその童話集をめぐる～写真と解説』が開催され、大学での研究は自分だけではなく次の世代へつなげようという言葉に参加者からは「大学での開催意義を感じた」との声が聞かれました。



平成 23 年 11 月 22 日 (火) ~ 平成 24 年 1 月 10 日 (火)

W.E. グリフィス来福 140 年記念事業 『お雇い外国人教師グリフィス展』

平成 23 年は、福井で最初の留学生である日下部太郎の留学先であるラトガース大学と福井大学との交流協定調印から 30 年であり、また日下部太郎との縁で福井藩のお雇い外国人になった W.E. グリフィス来福 140 年ということで記念展を開催しました。

館蔵「日下部・グリフィス記念資料室」のグリフィス関連資料と、福井市立郷土歴史博物館蔵の関連写真を展示しました。また、グリフィスがもたらした日本初米国式理化学実験室、住居模型、初公開となる『グリフィス書状(代筆・三岡八郎宛)』など、福井の科学教育を先導したグリフィスと、明治の頃の福井を知っていただく機会となりました。



医学図書館ミニ展示 3 部作

- 4 月 ようこそ医学看護の世界へ
- 7 月 「災害医療」について考える
- 11 月 書を捨てよ、旅に出よう



学*論*究*創*現=情報工房 in 医学図書館

“情報工房”って何?と思われるかもしれません。増築された情報工房グループラボはキャッチフレーズ「学*論*究*創*現=情報工房」で表現しているとおおり、“共に学び、論じ、究め、創り、現わす”をコンセプトとしています。そして、小人数のグループで情報を活用し、何かを生みだしていく、発信していく活力のある場所というイメージを込めています。

建物は2階建てで2階が情報工房グループラボとなっています。部屋の数には14室あり、それぞれ、テュートリアル授業で使用することを前提としており、一部屋10人程度が利用できるようになっています。3箇所だけ、移動式の壁で仕切ってあり、2部屋を1部屋として大人数で使用できるようになっています。最近、大学図書館が設置しているラーニング commons はオープンな空間の中に、グループ学習やプレゼンテーションなどができるスペースを共有する形ですが、情報工房はそれとは少しイメージが違うかもしれません。平成23年12月から運用を開始していますが、図書館の通常の利用では、一部屋3人以上のグループで使用してもらうようにしています。利用はカウンターで各部屋のカードキーを借りて使用できます。利用時間は次のとおりです。(ただし、図書館の休館日は閉室)

平日 9:00～24:00 (20:00～24:00は特別利用時間)

土日祝日 10:00～24:00 (17:00～24:00は特別利用時間)

利用に際しては注意点などもあるので、カウンターでカードキーを借りるときによく聞いてもらいたいと思います。



部屋の中は、組み替え可能なデスクとスクールカラーの青を基調とした椅子、ガラス張りの壁という風で、オープンな感じで非常に明るいです。設備としては、印刷機能付のホワイトボードが各部屋にあり、LANも整備されています。図書館では、ポータブルのプロジェクターも用意しているので、必要な場合は、カウンターで手続きをして使っていただけます。また、情報工房グループラボの入り口には書架を設置し、テュートリアル用の図書を並べています。その図書に限らず、必要ならば、閲覧室の図

書も部屋に持って行ってグループ学習に役立ててもらってもよいです。ただし、使用後は返却台へ戻していただくようお願いします。さらに、入り口から各部屋に向かう廊下の壁にはピクチャーレールが設置されていて、それを使って掲示物を展示することができます。たとえば、テュートリアル授業の成果物を展示したり、ポスターセッション等をすることもできるのではないのでしょうか。グループラボ入り口には電子掲示板による利用案内もあるので、ちょっと足を止めて、利用方法を確認していただくと良いと思います。

グループラボの1階はピロティになっています。タイル張りで広い空間にテーブルや椅子を置いて、春、夏、秋など雪が降る季節以外は憩いの場として活用できます。天気の良いときは、座って読書をしてもらうのも良いし、友達と談話するのも良いと思います。大きい空間なので、いろいろと用途があるのではないのでしょうか。こんなすばらしい建物ができて



図書館の学習環境が整備されたことを大変うれしく思います。

さて、14のグループラボや、ピロティのできた医学図書館を、これから多く活用していただきたいと思っていますが、利用に際して、マナーやルールは必ず守ってもらいたいと強く強く思う次第です。

別の話になりますが、建物ができる前に講義棟近くに桜の木があり、春になると花が満開に咲いていたのを覚えていらっしゃる方はいるでしょうか。個人的にはその桜がなくなってしまったことがちょっとさみしい気がする今日この頃です。



2011.04.18

附属図書館運営委員会（メール持ち回り）

- ・グリフィス来福 140 年記念事業実行委員会の発足について

2011.06.03

総合図書館運営 WG

- ・平成 23 年度総合図書館予算配分（案）について
- ・今後の資料整備方針 ～電子ジャーナル及びデータベースについて～

2011.06.20

医学図書館運営小委員会

- ・平成 23 年度医学図書館予算配分（案）について
- ・今後の資料整備方針 ～電子ジャーナル及びデータベースについて～

2011.06.20

医学図書館運営小委員会

- *平成 23 年度医学図書館予算配分（案）について
- *今後の資料整備方針について
～電子ジャーナル、データベースについて～

2011.07.12

附属図書館運営委員会

- ・平成 23 年度附属図書館予算配分比率の変更について
- ・今後の資料整備方針 ～電子ジャーナル及びデータベースについて～

2011.11.07

医学図書館運営小委員会

- *医学図書館増築エリアの名称について
- *外国雑誌 AACR 出版関連外国雑誌の購入について

2011.11.30

医学図書館「情報工房」オープン記念式典